患者を支える人々

1 リンパの流れ促すマッサージ
2 生活上のアドバイスも

リンパドレナージセラピスト

奥谷（おくたに） 由里（ゆり）さん

大阪市立総合医療センターには、手術後などに起こるむくみを扱うリンパ浮腫外来がある。毎日、治療が受けられる。

リンパ浮腫は、乳がんや子宮がん、前立腺がん、咽頭がんなど、さまざまながんの手術や放射線の治療による後遺症だ。体内のリンパ管の流れが障害を受けて、細菌や老廃物が処理されにくくなって発症する。

こうした状態になることによって、むくみが出て、慢性的な鈍痛、だるさ、不快感にも悩まされる。日常生活にも支障が出る。治療後すぐに発症する人もいれば、数年後、十数年後に症状が出る人もいる。

奥谷由里さん(40)は医師の指導のもとで、治療計画の立案、患者・家族への説明、治療とケア、重症化を防ぐための生活上のアドバイスなどを担当する。

リンパ浮腫によるむくみを起こしたまま、何年も経過すると、患部が鉄板のように厚く変形してしまう。治療では、リンパ管をやさしく刺激しながらリンパの流れを誘導する「リンパドレナージ」と呼ばれるマッサージをする。むくみを改善し、患部の軟らかさを取り戻す。治療後は「餅のようにポニョポニョになる」という。

さらに、その状態を維持するため、弾性包帯や弾性スリーブ・ストッキングを着用し圧迫する。運動療法でもリンパの流れを促す。

リンパ浮腫は、これまで患者が医師に訴えても「治療法はない。我慢して」と言われることが少なくなかった。

大阪市に住む吉田清子さん(73)は2000年に子宮体がんの手術を受けた。3年後、右足にむくみが出たが、昨年までの6年間、どの病院でも診断がつかなかった。むくみが悪化し歩けなくなり、集中治療を受けたところ、2カ月後、太ももは8㌢細くなった。毎月、外来に通う。

「治療後はひざの曲げ伸ばしができるようになり動きやすい。足も軽くなる。私には奥谷さんが必要です」と吉田さん。

ケアと指導には90～120分かかる。奥谷さんはその間、患者の心に寄り添う。「リンパ浮腫は、がんになったことよりつらいと言う人もいます。でも治療後には笑顔が戻る。一人で悩まず相談してほしい」と話す。

（医療ジャーナリスト・福原麻希）

92年から現在の大阪市立総合医療センターで看護師として勤務。05年日本医療リンパドレナージセラピスト資格取得。07年関西地方でいち早く外来を開設。同センターの患者だけを対象に外来は女性専門、入院患者は男性も診察する。

アスパラクラブのホームページに福原さんのコラムを掲載します